

《論文》

資本主義経済社会の発展と人間的自然 (human nature) の喪失、 そしてそこからの脱出の道

—「根づき」(L'enracinement) と「根こぎ」(déracination) という視点からの考察—

中 田 重 厚

—目次—

はじめに

- (a) オープンシステムとしての自然系とクローズドシステムとしての人工系という視点
- (b) “現実・理論・歴史” という歴史遡及的方法

1. エコロゴスとエコノモス

<開いた系 (open system) > と <閉じた系 (closed system) > という異質の世界 (宇宙)

2. <根づき> と <根こぎ> について

- (1) 根づく (根を持つ (張る)) ということ (L'enracinement, rootedness)
- (2) 現代日本における「根こぎ」(déracination, rootlessness) の様相
 - ① 高度経済成長期における農村部から大都市への人口移動と「ふるさと喪失」
 - ② 1980年代以降、保守政権下での新自由主義路線の下での若年層の大量失業—いわゆる「就職氷河期」の「引きこもり」現象

3. 技術と技能についての考察

- (1) 現代の技術と人間との関係 —技能についての考察—
- (2) 近代化 (=工業化、都市化) の中で忘れられたもの —職業人としての「誇り」(pride)
- (3) 技能 (craft, skill) と技術 (technology) との違い (「暗黙知」と「明示知」について)
 - ① 暗黙知 (Tacit knowledge) について
 - ② 医療現場における暗黙知について (R.セネットの考察から)
- (4) 作業員自身による仕事の自主管理 (workers' control) ということ
 - ① 工場労働の現場から —技術進歩というイデオロギーについて—
 - ② 分業についての考察
 - ③ 仕事の現場における作業工程の管理 (control) 権争奪の抗争の変遷 —作業員による管理 (workers' control) から経営者による労働者及び労働過程の管理 (manager's control) への変化—

4. 将来社会への展望

- (1) 地域内自給を中心とした社会づくり (自然と人間の共生社会をめざす)
- (2) オルタナティブ (もう一つの道) としての社会的企業、協同労働組織 (ワーカーズコー

プ、ワーカーズコレクティブなど利潤追求を目的としない組織)

(3) むすび

はじめに

この論文の全体を貫く視点は、次の (a) (b) 二つの観点である。

一つは (a) クローズド・システム (closed system) としての自然系とオープン・システム (open system) としての社会系とは全く異なるシステムであるという観点である。

第二は、(b) すべての社会事象を “現実、歴史、理論” という三つの視覚から考察することで、その本質に迫ることができると考える。つまり、現実を見れば、そこに歴史と理論があり、理論を考えればそこに歴史と現実があり、歴史を見れば現実と理論があるということである。ことに、ものごとの本質はその発生時の状況 (何故そのことが、どのような必要性 (もしくは必然性) の下に起こったのか) を知ることで明らかになる。これを私は、歴史遡及的方法と名付けたいと思う。なお、歴史遡及的方法は、社会事象のみならず自然事象についても該当するものとする [例えば地球の大陸移動説など]。

1. エコロゴスとエコノモス

ecology (生態系、生態環境) の語源であるエコロゴス (eco-logos) と、economy (経済学)¹ の語源であるエコノモス (eco-nomos) は、接頭語は同じeco-で始まるが、両者は全く異なる語である。

これについては、スーザン・ジョージの著書『オルターグローバリゼーション宣言 (Another World is possible, if...)』作品社 (2004) の中で明快に解説しているので少し長いがそのまま

引用すると、

エコノミーとエコロジーに含まれる「エコ」という語は、家族や地所や領土などを意味する「オイコス」(oikos) というギリシャ語が語源である。エコノミーの語源である「エコノモス」とは、領土を運営する規則 (あるいは一連の規則) のことである。エコロジーの語源である「エコログス」は、基底となる原理、精神、あらゆることの根拠のことである。聖ヨハネが、福音書の冒頭で「初めにロゴスありき」と断言した時の意味であり、通常は「言葉 (Word)」(フランス語ではverbe) と訳される。人間、動物、植物、それらを取り囲む大地や水、そしてそれらの間の相互作用といったものは、すべて同じ物理的な現実、同じ領土の一部なのである。

ギリシャ語の語源からすると、「ロゴス」は「ノモス」よりも偉大であり、ノモスの座を奪うことができるものと見なすことができるだろう。通常は、基底となる原理や精神が、規則や規制を定義したり、くつがえしたりすべきであるように、「エコログス」がエコノミーの背後の導き手ではなくてはならない。

しかし、社会に対して、規則に従うことを強要するグローバル化された資本主義経済ではそうはいかない。市場の力が、私たち相互の関係のほとんどを、そして自然界との関係をも形作るからである。ロゴスや他のものに対して、「エコノモス」、つまりグローバル化された経済そして市場は、二番目に位置することを拒絶する。現代では、ノモスは地球全体を統括する権限を要

求するのである。

<開いた系 (open system) > と <閉じた系 (closed system) >

エコノモスの体系、つまり今日の資本主義経済においては、企業はある一定の資本 (Money) を投下して原料と機械を買い、そこに労働力を加えることで生産を行う。そこで得られた商品 (Commodity) を売り、元手資本よりも大きな資本を手に入れる。つまり、 $M \rightarrow C \rightarrow M' \rightarrow C' \rightarrow M'' \rightarrow C'' \rightarrow \dots$ というのが資本主義的生産の一般定式である。

この市場経済の生産過程では、そこで排出される廃熱や廃物、廃水などはすべてこのシステムの外に放出される。つまり、経済のシステムは開いた系 (open system) である。

これに対して、市場経済以前の、狩猟・漁労の未開社会から農耕社会の、自然に依存する経済では、生産と消費の過程の中で出てきた排出物 (廃熱、廃物、廃水等) はできるだけシステムの内部でリサイクルする負のフィードバックが備わっている。すなわち、排出物 (植物の葉や茎、動物の骨や皮、家畜の糞・尿など) は大地に戻されて肥料になる。

18世紀末にイギリスから起こった産業革命に境に、地球はclosed systemからopen systemへと大きく転換する。やがてこの体系 (system) が今や地球規模にまで広がり、更には、今や自然のみか、人間的自然 (human nature) までも蚕食してきている。

したがって、この市場経済のシステムを転換するか、減速するかによってしか、地球の破滅から逃れる道はない。いま、地球上の各国で取り組まれているSDG'sは後者の方法であるが、それもグローバル資本主義の下での飽くなき資本増殖の下では付け焼き刃でしかない。²

地球温暖化の影響を受けた土地は多国籍企業

の草刈り場となっている。一例を挙げれば、温暖化の影響で、近年グリーンランドでは1,000億トンの永久凍土が解けて消失したが、今日のグローバル資本主義の下では多国籍企業や、その活動と利害を共有する国家資本はこれをビジネスチャンスと捉える。

例えば、グリーンランドは、永久凍土の氷が解け、そこには亜鉛、金、ダイヤモンド、ウランの巨大鉱石が現われ、これを今、アメリカ合衆国、その他の諸国やビッグビジネスがハゲタカのように狙っている。やがてはこれら地下資源をめぐる、各国の軍事紛争にも発展しかねない様相である。

2. <根づき>と<根こぎ>について

(1) 根づく (根を持つ (張る)) ということ (L'enracinement, rootedness)

シモーヌ・ヴェーユは、『根をもつこと』(L'enracinement) の著書の第二部 (根こぎ (déraciné)) の冒頭でつぎのように言っている。

「根づく」ということは、おそらく人間の魂の最も重要な要求であると同時に、最も無視されている要求である。これはまた、定義することがもっとも困難な要求の一つである。人間は、過去のある種の富や未来への予感を生き生きと保持している集団の存在に、現実的に、積極的に、かつ自然なかたちで参加することを通じて根をおろすのである。自然な形の参加とは、場所、出生、職業、境遇によって、自動的におこなわれた参加をさす。人間はだれでも、いくつもの根をおろす要求をいだいている。つまり、道徳的、知的、霊的生活のほとんどすべてを、彼が自然なかたちで参

加している環境を介して受け取ろうとする要求をいただいているのである。³

天然の草木にとっては、生存に不可欠なものは、自然の土壌と水であり、魚にとっては天然の水である。それらを欠いたら、草木も魚も生存できない。

人間は、共同社会（出生地、家族、近隣、職場…）での生活に対して、实际的、積極的かつ自然に参加することによって根をおろす。人間は誰しも多様な「根もと」を必要としている。人間には、自らその一部を形成している環境を通して、その道徳的、知的、精神的生活のほとんどを引き出す必要がある。

(2) 現代日本における「根こぎ」(déracination, rootlessness) の様相

① 高度経済成長期における農村部から大都市への人口移動と「ふるさと喪失」⁴

戦後の高度経済成長戦略の下で、大都市、中小都市の工業化の働き手として、農村部から東京圏、大阪圏、中京圏へと人口流出が起った。働き口を求めて大都市部へと流入した農村出身の若者たちは、男女いづれも単身であり、かつての社会のような人的繋がりを欠如していた。家屋はただ寝るための場所でしかなく、彼らはいわば「根なし草」のような存在であった。

かつての農村は専門化に向かう農家と、若い働き手を都会に送り出す兼業農家とに二極化する。後者の兼業農家は残された家族が生活するのに必要な農地（約30アール）を残し、あとの農地は売却することになる。

30アールの農地⁵は、都会に出ていった若者が失職した場合に帰郷して家族の一員として生活ができる安全弁としての農地であった（かつて、「潜在的失業者」と言われたものは、都会

で失業した若者が帰郷しても生活が可能であり、統計上、「失業者」として数字の上で表れてこない存在であった）。

② 1980年代以降、保守政権下での新自由主義路線の下での若年層の大量失業⁶—いわゆる「就職氷河期」の「引きこもり」現象

総務省の調査によると、2019年3月29日現在の40～64才を対象にした「引きこもり」の総数は、全国で61.3万人も居ると報告されている。ただし、この数字は、本人に対して「あなたは「引きこもり」か否か」という問いに対する回答であるので、実際にはこの倍の100万人以上といわれている。つまり「引きこもり」であっても、自分はそうなりたくてそうなったわけではなく、（自分の納得のいく（自分がやりたくて、しかも社会のためになる））仕事があれば、いつでも社会に出て活躍したいと願っている人たちであると推定されるのである。

つまり、これは当人たちだけの問題というよりも、むしろ現今の社会そのものに問題があると考えべきである。仕事はあるにしても、当人たちに納得できる、人間らしい仕事はほとんどないからである。近年、デヴィッド・グレーバーの『ブルシット・ジョブ』という著書が刊行され、話題を呼んでいるが、今日の社会では、ブルシット・ジョブ（つまり“くそ、どうでもよい仕事”）が全体の60%を占めているという驚くべき研究報告がなされている。これは、経済効率のみを追い求めるグローバル資本主義が、人間労働を機械や最新技術に置き換えていった結果であると考ええる。仕事（労働）の質の劣化と言う深刻な事態である。なお、我が国においては、1980年代以降の小泉政権下での「新自由主義政策」が若年層の半失業状態を生み出した元凶である。そして、この政策は現政権にまで継続している。

3. 技術と技能についての考察

(1) 現代の技術と人間との関係 ―技能についての考察―

S.ヴェーユは、第二次大戦中、対独戦の中で著された「抑圧と自由」(Oppression et liberté)の中で、経済の加速度的な集中化によって、工作機械の自動化が進展するのは不可避であるとした上で、そうした中で働くものの尊厳を保つためには、「個とみなされる人間に権利として帰属するものと、人間に逆らい集団に武器を与える性質のものとを切り分けて、後者にかかわる諸要因を抑制し、前者にかかわる諸要因を発展させようと努めることだろう」と言っていた。

S.ヴェーユは、第一次大戦前に出現した工作機械は自覚的労働者の中で最も美しい原型である熟練労働者を生み出したという。つまり、こうした類の工作機械は、作業者の腕と技（創意・工夫）の余地があり、彼らはそれに誇りを感じることが出来たからである。やがて、工作機械は自動的な形態をとることとなり、これにより作業者の創意・工夫の余地が狭められてくる。その原因は資本制生産の下での最大限利潤獲得のための企業間・国家間の競争による経済の加速度的な集中化にある。

S.ヴェーユは苛酷とも言える工場労働の直接体験の中から導き出された結論は、まず、科学史を、人間の精神の対象への自覚的な働きかけという視点から（つまり生産性ではなく、労働者と労働の関係の視点から）徹底的に研究することであると言っている。また他方では「一方では日常の生、なかでも労働における日常の生において、他方では科学的方法的理論化において、人間の思考が実現してきた精神の歩みにみられる類比に光をあて、余すところなく解明せ

ねばならない」と言う。

また、S.ヴェーユは、本文の話の最初の部分で「現代文明の（将来は）……思考と行動する個人の能力が拡大するにつれて、生がいつそう非人間的でなくなるだろうということだ」ときわめて人類の未来については楽観的である。しかし、他方では何も努力せずにいれば「現代文明は、人間をうち砕くものを含んでいる」と警告を発する。

以上のS.ヴェーユの指摘の中で挙げられた第一次大戦前に出現した工作機械は、当時の労働者にとって作業者の腕と技（創意と工夫）を研く余地があるもので、彼らはそれに誇りを感じることができたと言っている。今日の資本主義経済は経済効率を求め、最大限利潤獲得に血道をあげているが、生産力の上昇のみをめざす技術の向上は、そこに携わる労働者、技能者の腕（技能）や技をないがしろにするものであれば、それは人類の退化といえるものといえよう。

人々は生活を支えるために様々な職（仕事）に就いているが、そこで永年培って体得されたものが職業人としての“誇り”ではないだろうか。このような視点から歴史を遡って、考察してみたいと思う。

(2) 近代化（＝工業化、都市化）の中で忘れられたもの ―職業人としての“誇り” (pride)

今日、市場競争のグローバル化や人手不足を背景に、人工知能（AI）やロボットがそれにとって代り、かつては人間が機械をcontrolしてきたものが逆転して機械が人間をcontrolするようになってきている。

かつての職人は、代々先人から受けつがれた手引書（レシピ）（マニュアル）はあるが、それを参考にしつつも、何十年もの長い修練の末

に自らの技を身につけてきた。つまり、こうした職人技は、例えば調理人でも、建築家でも、教師や医者でも、また農民や漁民、林業家、商人などいわゆる第一次・第二次産業、第三次産業においてもすべての職業（仕事）において言えることである。すべての職業において特有の長年培われた技能やknow-howが存在するのである。例えば、商人の技能として「三方よし」というものがある。これは近江商人が街道を通過する中で身につけた「商売道」であり、「商売道においては売り手と買い手が満足するのは当然のこと、社会に貢献できてこそよい商売といえる」という考え方である。これは、現代のCSRにつながるものとして「伊藤忠」をはじめ多くの企業の経営理念の根幹をなしている。

品質の高い商品（goods）は、すぐれた技能者（職人）の手で作られ、その商品の価値、特質をよく知っている商人の手により客に提供される。職人も商人もその仕事のknow-howは長い間の修練の中で会得されるものである。

さて、今日の職場（仕事場）の現場に目を転じてみると、かつての労働とは大きく様変わりしている（もちろん、特殊な仕事は別として）。大量生産・大量消費を目指すオートメーション工場では、いずれの職場も機械が生産の主役であり、作業員（人間）はその脇役の地位へと転落している。アメリカの社会学者リチャード・セネットの書『The Corrosion of Character（人間性の腐食：日本語訳では何故か「それでも新資本主義についていくか」という題名になっている）』ダイヤモンド社刊（1998）で描かれているボストンの製パン会社の職場の変化がそれを如実に物語っている。

営利を最大目標とする企業体制の下では、効率性の高い機械が作業員よりも優位におかれ、作業員は機械の単なる補佐役に転落している。『人間性の腐食』の中で描かれているパン工場

では、作業現場でパン焼き頭（見習い修行の末）となった職長の下で働く労働者はほとんどが長くて2年しか工場にとどまらないただ生計を立てるための賃金を得るために働きに来ている労働者たちである。この工場では、フレックスタイム制が低賃金労働力を誘う疑似餌（ルアー）として使われている。

かつてマルクスは「疎外」という用語で、資本制生産現場の労働を表現したが、「それは不幸にも分裂した意識でありながら、物事がありのままに見え、自分がどこにいるかがありありとわかる状態を意味する。」が、ここで働く労働者たちには「疎外」という意識すらないとセネットは言う。ここで働く労働者たちの日常感覚では、「疎外ではなく無関心」なのである。彼らは、定められた通りに、ウィンドウズ画面のボタンを押すだけの知識があれば足りるのである。ここは、かつてイタリアパンを作るギリシャ系の職人たちが代々たずさわっていた職場であったが、何年もの熟練を必要とするパン作りの仕事には職人たちは原料、品質、味、とりわけ独特の職人技等に誇りを持っていた。しかし、経営者が交代し、コンピュータ機器による大量生産工場に変わったことで、かつての職人技術は全く無価値なものとし、ここでは生産の主役と脇役が逆転し、かつてのパン商人特有の技能は無価値なものに変質する。ここで働く労働者たちにとっては「パン作りでも靴の製作でも、印刷でもすべて同じ」（フラット化する労働）⁷なのである。ここはかつての職人が有する人間の尊厳が完全に失われている社会と化した。

ひるがえって今日の日本の大工場の現場を見ても同じような光景が展開している。オートメーション化が進んだ大工場の労働者の仕事は機械が順調に機能しているか否かのただの監視役になり下がっている。機械が止まったら、彼ら

にはそれを技術者に伝えるだけであるから誰にでもできる仕事である。つまり、そうした仕事からは特殊な技能と、それに費やされる職人的技能、そして職人社会の伝統的生活（家族的関係、地域の人たちとの交流、同職者同士の人間関係）のすべてが完全に欠落してしまっている。技能が必要とされる社会では、長年人々が担って来た文化が育まれ、花開いてきた。

今から20年ほど前に、私が三条の金物業を見学に訪れた時、ある鋸の小工場の社長は、「ここで作られる鋸は世界一です」と誇らしげに語り始めた。これにはど肝を抜かれたが、説明を聞きなるほどと納得させられた。私たちが金物業と聞くとすぐにドイツの金物業を連想するが、日本の伝統産業である金物業の歴史は古く、ドイツ以上であるという。一般庶民の住居から寺院や城の建築に至るまで、古代からこの大工道具が使われてきた。

三条市の鋸メーカー社長（職人）の誇りは一体どこから生まれてくるのだろうか。どんな仕事であれ、一人前になるには約一万時間もの修行を要すると言われている。かつての職人は、親方の下で修行を積み、その技を鍛え上げてきた。そしてその成果は、その職人特有の作品となって現われる。芸術作品でもある。その職人特有のものだから世界に一つしかないもの（Besonderheitというドイツ語が的確にそれを表現している）である。そしてその作品に職人は誇りを感じている。本人も職人である三条金物業の社長の「世界一です」といった言葉の意味は“世界に一つしかないすぐれた品”という意味だと解する。長い修行を経た職人の手から作られた製品は、いずれも世界一（つまり世界に一つしかないすぐれたもの（逸品））であり、優劣をつけ難い、絶対的な価値を有するものと言えよう。

(3) 技能 (craft, skill) と技術 (technology) との違い（「暗黙知」と「明示知」について）

すべての人間にとって、生きていることの証（あかし）の最も大切なものは自分の日々の行為が他の人々にとって役に立っているかどうかということであろう。現今の日本では、若者の“引きこもり”という社会現象が起きているが、その理由は、その本人にとって、自分の存在が認められる（社会的評価を受ける）意味のある仕事がないということだろう。今日の仕事の多くが（肉体労働であれ、精神労働であれ）ただ毎日の生活の資（生活費）を稼ぐだけの手段となってしまう。多くの仕事がフラット化（平準化）してきたということである。

他方、各地の生産現場では、とりわけ中小零細企業では、過去から伝承された技能を守り育てていく気風が残っている。これは工業分野のみでなく、自然を守り育てる産業である農林・漁業及びそれら産物を加工する食品加工業や醸造業などである。

今日、私たちが為すべきことは、こうした過去から受けつがれた伝承がまだ燠火（おきび）として残っているうちに、それを復興させ、自然と人間的自然 (human nature) を蘇らせることである。

① 暗黙知 (Tacit knowledge) について

長年その仕事にたずさわった人が経験から身につけた知であって、これは今日様々な仕事があるが、肉体労働であれ、精神労働であれ、その職種に特有の知である。すなわち、「社員や技術者が暗黙のうちに有する、長年の経験に基づく知識である」と定義することができる。

かつての日本では、組織内では先輩から仕事のイロハを教わるOJTや、時間外の会食の席での先輩と部下とのコミュニケーションの中で、

暗黙知の継承がごく自然な形で行われていた。だが今日かつてのような伝承が難しくなり、暗黙知を形式知化して、会社で知の共有を行っていくというのがknowledge managementの主要な目的となっている。

② 医療現場における暗黙知について (R.セネットの考察から)

R.セネットは、近年の労作である『クラフツマン (The Craftsman)』筑摩書房刊 (2008)の中で英国の医療現場の事例を挙げ、暗黙知と明示知 (形式知) について考察している。

これによると、英国の医療制度は、1948年から始められた国民健康保険 (NHS) の下での医療システムによって行われてきた。

しかし、このシステムの下での医療も、年月とともに衰退してきて、病院は老朽化し、看護師数の減少など様々な問題が出てきた。そこで当時 (1990年代) の英国の政治家たちは、20世紀のアメリカの自動車産業で実施されたフォード生産方式という労務管理方式を取り入れることに決定した。これにより、英国の医療現場は大きく様変わりすることになる。医療現場で働く医師や看護師は個々の作業時間の適正時間 (再短時間) によって測定され管理されることになる。

だが、医療といういわば専門領域の仕事では、医師も看護師も医療「技能 (クラフト)」という暗黙知による仕事の曖昧 (ambiguous) な分野が不可欠であった。この曖昧な分野についてセネットは次のように説明している。

「(かつては) 看護師たちは、年配の患者らが訴える痛みや苦痛だけではなく彼らが語る子どもたちの話にも耳を傾けていたものだ。患者が危険な状態に陥ったときには、たとえ彼ら／彼女らにそうする法的な

資格がない場合でも、看護師たちが病室に踏み入れることもよくあった。もちろん病人を自動車のように修理することはできないのだが、このエピソードの背景には、実践＝業務の規範についての、より深い核心が存在している。よい仕事をするというのは、曖昧化＝多義性 (ambiguity) に興味を惹かれ、それを詳しく検討し、それから学習することを意味している。Linuxのプログラマーの場合と同じように、看護技能 (craft) は問題解決と問題発見の境界領域を巧みにさばく。だから老人のおしゃべりに耳を傾けながら、看護師は診断用のチェックリストから漏れ落ちそうな病気の手掛りを、拾い集めることができるのである。」

医者の仕事についても看護師の仕事とはほぼ同様のことが言える。

フォード方式の医療モデルでは治療すべき特定の病気が存在しなければならない。医者の仕事ぶりの評価は、例えば「肝臓部分の病気ならば、肝臓の治療にかかった時間を測定し、治療した肝臓の数を数えることによって可能となる。これはフォードシステムの元になるテーラーシステムの「時間および動作研究 (Time-and-Motion Study)」である。病人の身体上の容態は一様ではないため、個々の病人の容態の治療も画一ではない。ましてや病状が確定できない病気においてはなおさらで、ここでは医師の腕が試される。つまり暗黙知が働く局面であるが、新しく採用されたNHSでは全くカウントされないのである。

これは高度な知識を要する医療現場のみならず、極めて単純な作業の場合でもすべて身体にその動作が埋め込まれている。例えばナイフで鉛筆の芯を尖らすという行為を考えてみよう。長い間に知らず知らずそれを身につけているの

を知る。初めての人は、左手に鉛筆を持ち右手にナイフを持って右手だけを動かし切ろうとするがうまくいかない。慣れている人は、長年やっている内に右手はほとんど動かさずに、左手を前後に動かすことできれいに削ることができる。これは単純な技能のみならず、高度な技術の場合でも同じことが言える。R.セネットは、暗黙知と明示知との関係についてつぎのように言っている。

ある技術を習いおぼえている時、私たちはそうした手順の複雑なレパトリーを発達させていくのだ。より高度な技術の段階では、暗黙知と自覚的認識の間に絶え間ない相互作用が起きている。その際、暗黙知は錨として、明示的認識は批評と矯正として、それぞれの役割を果たしている。NHSのような制度が大混乱を誘いながら改革を打ち出し、暗黙知の錨が成長するのを阻むとき、そうした判断のエンジンは停止する。人々は判断するという経験を知らず、ただ良質な仕事についての一揃えの抽象的な提案を携えているだけなのである。

(4) 作業員自身による仕事の自主管理 (workers' control) という事

① 工場労働の現場から —技術進歩というイデオロギーについて—

今日の仕事の現場は、ブルーカラーの職場では、NC機器等オートメーション機械が生産の中心に位置し、ホワイトカラーの職場もパーソナル・コンピュータやNC機器などを操作運営される形で近代のメカであふれている。

いずれの現場も機器の種類が異なるものの、オートメーション機器がなければ成り立たない現場と化している。

ここで考えるべきことは、そこで働く workers の状況である。技術進歩は果たして

人々の幸福（仕事への充実感、達成感、同僚や家族、友人との親密な関係）に結びついているのか否か、ということである。現状を見る限り、答えは“否”である。それは何故なのか。

以上のことはかなり込み入ったことのように思われるが、そのことの真実はそのことが起った初期の出来事を考えることである。つまり、それが何故起ったのか（目的）、そしてそのことで誰の（いかなる階級の）ために行われたのかを明らかにすることが肝心な点だと考える。ものごとの本質は、その発生時の状況（歴史的原点）に遡ることで明らかになる。

② 分業についての考察

分業には社会内分業と企業内分業の二つの形態がある。これについては、H.ブレイヴァマンがその著書 *Labor and Monopoly Capital* 『労働と独占資本』岩波書店刊（1978）の中で明快に解説しているので、これに倣うことにする。

まず、H.ブレイヴァマンは、社会的分業は既知のあらゆる社会の中の織物業や漁業、建築業など様々な分野にわたり、個々の業種の中でそれぞれの能力に応じ手の仕事の分類（分業）がみられると言っている。

しかし、作業場内分業は、これまでの社会の社会内分業とは異質のもので、個別の職業を確認し、個々の労働者がその生産物の全工程を把握することなく、個々の工程に労働者を張りつけていく。

その結果、作業場内分業は、そこで働く workers たちを生産工程からも生産物からも疎外される存在となる。つまり、ここでは人間が人間として扱われず、人間の「もの化」が現象する。

③ 仕事の現場における作業工程の管理
(control) 権争奪の抗争の変遷 —作業者
による管理 (workers' control) から経営
者による労働者及び労働過程の管理
(manager's control) への変化—

市場経済の下では、最大限利潤の確保を目的とするが故に生産のスピードアップが至上命令となる。すなわち、ここでwork（仕事）からlabor（労働）への変化が起こる。ここでは、資本主義経済の初期の段階でオートメーション化が進む以前の労働現場で何が起ったのか。そのことを知ることが“ことの本質”を明らかにすることである。

「ものごと（社会事象も自然事象も）の本質はその始原」（始まりの状態）にある」という考えの下、オートメーション化、自動化が進められた資本主義経済社会の初期の状況を（A）まず、産業革命が起った18世紀の中葉（1770年～1850年）のイギリス社会と（B）それに続く19世紀後半（1843年～1893年）のアメリカ社会において生じた前工業的な社会及び人々の生活慣行と労働慣行の変化を考察する。

（A）産業革命が起った18世紀の中葉（1770年～1850年）のイギリス社会

まず、イギリスの産業革命期の初期における手織物業者の職人やその手間稼ぎ労働者として働いていた地元農民たちが起こした自然発生的な反乱であるラッドライト運動について考えてみる。

この大規模な手織物業の手工業者及びその下で働いている農民たちが起こした反乱は今日の近代工場での自動化された最新技術の下で働くworkersと経営者との関係を考える上で重要である。今日のオートメーション化の進んだ近代工場では職場の統制権（コントロール）はすべてのを経営者側が握っており、彼らにとって

はそれがすべてである（ノーブル『人間不在の進歩』こぶし書房刊（2001）146～147pp）。

この、いわゆる「ラッドライト運動」なるものは、1811年から1817年にかけての頃、マンチェスター、ヨークシャー、ミッドランドなどのイギリスの中・北部の手織の織物業者やそこで手間稼ぎ労働者として働く地元の農民たちが起こした新発明の自動織機に対する反乱である。

やがてこの新機械は工場主の下に買取られ、彼ら手織の織物業者はもとより、そこで手間稼ぎで糊口をしのいでいた小農民たちの生活を奪う物となろうから、彼らは夜間にひそかにそれら機械を盗み出し、隠匿するかもしれない機械を打壊すか、という直接行動で彼らの怒りをぶつけたのであった。しかも、これらの手織職人、小農民の行動が相当広範囲に広がったため、これを取り締まるため国家の軍隊がこの運動を弾圧するという行動に出た。“ラッドライト”という名称はネッド・ラッドという男がこの運動の首謀者であるといわれているが、実在の人物かどうかとも疑わしい。当局が取り締まるために付けた架空の人物だったかも知れない。

問題なのは、この画期的な自動織機の発明者は、この反乱を起こした職人が農民たちと同じ境遇の人間だったということである。発明者はジョン・ケイという男だが、彼は北イングランドに住む貧乏な織物職人で、元は時計工であった。そのため、彼は機械のしくみについてはよく知っていた。当時の手織の機械は「沢山の縦系が枠の間に二段になり、その間に横系を巻きつけた杼を手で渡して、その横系を一本一本箴でたたいて締める」⁸という作業であった。この手作業では、どんなに頑張っても一分間に60回くらいしか杼を渡せない。そこで「彼は工夫を重ねて、ひもを引っ張るだけで素早く杼を渡すことができる“飛び杼”を発明することに成功した。これにより、今までの2倍の早さで布を

織ることができるようになった」⁸という。

ジョン・ケイの自動織機の発明は1732年のことだったが、この発明は一毛織業者の善意からのものであったが、当時の毛織物業者やその下で働く農民たちにとっては悪意のようなものとして映った。やがてそのことを知った近所の職工たちが彼の家に押しかけケイの発明した自動織機をメチャメチャに破壊してしまったのであった。

やがて工場主たちはこの自動織機のことを知るや、工場にこの機械を据え付け、今までより2倍ものスピードで布を織り、多くの労働者を雇い入れ多大な利潤を獲得することになった。

その後の毛織物機の発明は動力源が人力から馬力、水車と写り、生産性は飛躍的に増大するも、これにたずさわる現場の労働者及び技能者の裁量権 (discretion) は益々経営側に移行していくことになっていく。

ジョン・ケイの自動織機の発明は、かつての毛織機の機械の業者や農家の手間賃としての農民たちにとっては生活の基盤を脅かす(“根こぎ”にする)ものとして映った。

(B) 19世紀後半(1843年～1893年)のアメリカ社会

次に、19世紀後半の工業化のはじまるアメリカ社会において考えてみる。1861年～1865年の南北戦争がアメリカの工業化の大きな転機となっている(南部の奴隷制度解放とともに奴隷労働者及び移民労働者が北部工業地帯に流れ込み、アメリカ合衆国の工業化が飛躍的に進展する)。

しかし、このような激しい経済的变化にも拘らず、「アメリカの旧来の社会構造、またアメリカ生まれの職人ならびに移民の職人の前近代的な根強い文化を、全面的にうちくたくことはなかった」(H.G.ガットマン『金ぴか時代のア

メリカ』平凡社刊(1986) p.52)。

19世紀初期の工場現場では、かつての人々の職人社会の伝統がそのままの形で持ち込まれ、労働とレジャーが一体となった生活習慣が工場でも生き続けている。その事例を社会史家のガットマンは生き生きと描いている。ニューヨーク市の造船所、マサチューセッツ州の靴工の職場、ミルウォーキー州の葉巻工などであるが、彼らは共に前近代的な根強い文化を持っており、職人たちは働くときは猛烈に働き、他方くつろぐときは皆一斉に休み、くつろぐという労働と怠惰のくり返しの生活習慣を持っていた。

仕事のあい間には、くつろぎの時間を入れ3時半頃には必ずおやつを食べ、皆で歓談する。今で言えばいわゆる「モグモグタイム」である。

そして土曜日の夜は、一週間の重労働のあとで、外出し、町をぶらつき、大抵は行きつけの居酒屋で友だちと会い、愉快的時間を過ごす。そしてその愉快的時間は日曜日まで続いたという。したがって、次の月曜日は規則的な大仕事にとりかかるための準備の時間(道具を砥いだり、材料を運んだり、いま話題の問題について話し合ったり、明日の大仕事のために物を整える時間)であった。そこでこの月曜日のことを「ブルー・マンデイ」と呼んだ。つまり、ブルー・マンデイとは、休日の飲酒のふつか酔いで周囲がすべてブルーに見え、すぐには仕事にとりかかれない日のことである。

このように、職人社会の伝統は、仕事をやる時は集中的に行ない、仲間との休みやくつろぎという自分たちのペースを新しい工場制度の中にも持ち込んだのであった。彼らにとって労働(仕事)は生活の一部であったのだ。しかし、やがて生産能率向上のため、仕事の主導権は職人から工場主の側に移行することになった。テーラーの科学的管理法、さらにはフォードシス

テムに席を譲り、工場労働の主導権は完全に職人や労働者から企業主側に移行し、職人社会の伝統は消え去る。

なお、当時のアメリカの大都市の人口の70%以上がヨーロッパ大陸や他の国々からの移民であり、工場労働に占める移民の数は非常に高かった。しかも彼らは、ほとんどが家族とともにやってきているので、ヨーロッパでの生活習慣をアメリカ社会及び工場現場の中にも、そのままの形で持ち込んだのであった。それは例えばセネットの書 *The Corrosion of Character* の中で描かれているボストンのパン製造工場におけるギリシヤ人のパン職人の例でもそうであった。つまり、ギリシヤ人のパン職人たちは父親の代から受け継いだ自分たちの仕事に誇りを持っていたし、かつての生活習慣、労働慣行をそのままの形でアメリカ社会の中に持込んだのであった。しかし間もなく、パン工場も経営者の交代と共に大量生産方式のオートメーションの機械による工場へと変わり、ギリシヤ職人たちの職場から単純労働者の短期雇用の工場労働者の職場へと変貌をとげるのである。このような状況は無機質な文化と言えよう。なお、このパン作りの近代工場の中でオートメーション機械の現場監督（黒人）だけがこのかつてのイタリア風パン職人（ギリシヤ人）の伝統を習得している唯一の人物である。この人物は、この労働現場では、ここではない職人が作り出した独特のパン“文化”がオートメーション化により喪失してしまったことに失望している。人間の生活にとってもっとも尊い大切なもの、それはそこでしかない“文化”であり、人々の生活の喜びだからである。

4. 将来社会への展望

現在、世界的規模で取組まれている「持続可

能な発展」(SDGs) という将来社会への展望は、少なくとも今日のグローバル資本主義の下では不可能な幻想でしかない。ただし、不可能だとしても様々な局面での破壊を最小限に抑制する力にはなり得るであろう。こうした国際的規模で取り組まれている反グローバリズムの活動ならば、いま世界的規模で行なわれている地球温暖化により北極の永久凍土の融解をもビジネス化しようとする大国の国家規模の暗躍をも阻止すべき力を持っていなくてはならない。

国内において、現在進行中のリニアモーターカーの国家レベルの推進は、シールド工法による地下鉄道建設により南アルプスの地下水の水脈を切断し、河川の水量を激減させ、近辺の農業に被害を与えている。JR東海が行なっている事業だが、国家がその推進母体である。リニアの推進目的はあくまで国外向けのもので将来これを海外に売り込む目玉にしたいということだ。この建設には、そのスピードと浮上のためにプラスとマイナスの電極を交互に組み合わせしていくコイルが不可欠で、そのためには大量の電気が必要となる。つまり、そのための電力としては自然エネルギーではなく、巨大なエネルギーを生み出す原子力発電に頼らねばならないというわけである⁹。地球温暖化の国際基準を遵守するという約束の下、日本の現政権は火力発電削減を謳ってはいるが、原子力発電は将来20%程度残している。リニアを推進するためには巨大電力源としての原子力発電が不可欠というわけである。

では、リニアの開発に積極的に関わり、その推進役である技術者たちはどうであろうか。彼らは自らの技術力に誇りを感じ、そのことを生き甲斐と思って専念しているかも知れない。しかし、主観的にはどうであれ、このことが自然や人間的自然を破壊させるものであることが客観的事実であるならば、彼らとて国家官僚や政

治家、そして鉄道資本、建設大手の首脳部と同様、同罪であることをまぬかれたいと考える。

(1) 地域内自給を中心とした社会づくり（自然と人間の共生社会をめざす）

今日、グローバル化の中で様々な生活物資が海外から流れ込み、かつての地域社会が崩壊の危機に瀕している。だが、そんな中、中央集権的、大都市志向の流れに抗するもう一つの流れが日本の各地で広がっている。

例えば、その一つは、東日本大震災（2011年3月）を契機として山形県米沢市を中心にして起こった「置賜自給圏構想」という一大運動である¹⁰。2011年3月の東日本大震災の時、山形県米沢市は東北救援のための中継拠点となった。この経験は当時「生活クラブやまがた」の理事長、井上肇さんに強いインスピレーションを与え、「日本の生産基地、東北の再興のきっかけをこの置賜地域が担うべきだ」と考えるに至り「置賜自給圏構想」に結びついていったという。そしてこの考えは地元の文化人や有力者たちの共鳴するところとなり、2014年4月に「置賜自給圏構想を考える会」設立総会が開催されるに至った。

置賜地域は山形県南部に位置し、米沢市を中心とした3市5町（米沢市、南陽市、長井市、高畠町、川西町、小国町、白鷹町、飯豊町）の自治体から成立っている。当地域は最上川の上流に位置し、水量が豊富で農産物の生産量が高い地域である。盆地で冬が長いことから食の加工技術が伝承されている。その代表が漬物である。そして畜産では米沢牛が飼育されている¹¹。

また、地元の高畠町で長年、有機農業推進の先頭に立ってきた星寛治さんもこの呼びかけ人の一人である。置賜地域の「自給圏構想」は、

かつて上杉鷹山の地域資源を生かした藩政改革に学ぼうという志もある。すなわち「食と農とエネルギーの自給を基軸にし、産学官、教育、福祉、医療を結合することによって地域循環型社会を実現しよう」という構想である¹²。

この置賜自給圏構想は、経済評論家の内橋克人が提唱していたFEC自給圏の構想を念頭に入れたもののように思われる。内橋は、かつて著した『環境知性の時代（同時代への発言＜5＞）』岩波書店（1999）の中でこの三つの自給自足とすることを論じている。

FはFoodの略で、食料は地元で採れたものを食する。そのため、地元で採れた食材を使っての加工業、地域内自給を心がける。EはEnergyの略で、地下水、燃料（木材、バイオマス）、太陽光などを地元で調達するための仕組みをつくる。CはCareの略で、人間介護、医療、若者支援、児童の自然学習など地域民が協力し合う人間関係を築くことである。そして、最後にこうした自給圏は金銭が地域内に留まるようにするため地元の地方銀行、農協、信用金庫などが協力し合って、金銭が地域内で循環するシクミを作っていくことだと考える。

近年、田園回帰1%戦略と称して、地域経済を復活させ、地域内自給体制を整えることで、金銭が地域内に留まるシクミを積極的に推進する動きが経済学者の藤山浩を中心に出てきている¹³。

(2) オルターナティブ（もう一つの道）としての社会的企業、協同労働組織（ワーカーズコープ、ワーカーズコレクティブなど利潤追求を目的としない組織）

2020年12月の臨時国会で「労働者協同組合法」が成立するに至った。先進工業国では労働者協同組合の法制化はすでにほとんどの国で制

定され、活動は活発に行われているのに比し、わが国ではとりあえずNPO法の下で実際活動が行われてきて、法制化の運動は約30年続けられようやく実現のはこびとなった。ただ、わが国の場合は他の国と異なりワーカーズコープとワーカーズコレクティヴが同一歩調をとり共同提案という形で実現したユニークな法案となった。

ワーカーズコレクティヴは戦後日本の消費者運動から出発した団体であり、ワーカーズコープはこれとは異なり、戦後の全日自労（労働組合）の失業対策事業、つまり仕事起こしの運動として推移してきたものであるが、いずれも協同組合としては差異がなく、今回の法案も共同提案として成立したものである。

資本主義社会の下での両者の他の企業と異なる点は、いずれも組織のメンバー一人一人が組織の運営の主体者である点である。また、資本方式の企業とは異なり、利潤の追求を目的としない点である。メンバーの全員が出資し、仕事は全員が受け持ち、組織の運営には全員が責任をもって関わる組織であり、そこには上下関係はない。

(3) むすび

こうした組織づくりは、今、各地域でとり組まれている。(1)のFEC自給圏の実践と連動し、持続可能な社会への実現に寄与するものと考えられる。なお、現行ではNPO法人や地方自治体が運営する「社会的企業」など営利を目的としない企業もこれと連動して地球環境と人間的自然（ヒューマンネチャー）を守っていくであろう。

(1)(2)いずれの方向においても両者は補い合って自然系を中心とする社会形成に寄与していくものと考えられる。しかし、国家資本に

合体したグローバル資本主義の下では、この体系をつき崩していく道「抵抗」と「創造」は極めて困難で遠い道のりになることは間違いない。

文末脚注

- 1 日本語の「経済」という語は「経世済民」という語であるから、西欧のeconomy「市場経済」（あらゆるものが価値法則によって支配される）とは全く異なる概念である。
- 2 マッケンジー・ファンク『地球を売り物にする人々』ダイヤモンド社（2016）M. Funk, Windfall（2014）
- 3 シモヌ・ヴェーユ『根をもつこと』春秋社（1967）
- 4 近年、農学者の祖田修氏が『失われた居場所を求めて』三和書籍刊（2019）という著書を著し、この中で、氏は戦後日本の急速な都市化と工業化が人々を「根こぎ」の状況に追いやっている現実を見事に描いている。
著者の結論は、今私たちは、大地、自然、農業・農村をベースにして、地に足の着いた文明と文化の再構築をめざさねばならないと言い、かつて農村社会が培った「縁側文化」からの「縁」の理念は、新たな地縁社会（都市民と農村民及び国外の人々とも関わり合う新しい「縁」）を創っていく可能性を有していると言い、そこに希望を託している。
- 5 15a（アール）の農地は1家族（5人程度）の消費する米と野菜を最低限確保できる生命線である。したがって都会に出た若年層が万が一失職したとしても、帰郷して家族と一緒に生活できる面積である。農家として米や野菜を出荷する場合には30aあれば十分やっていける。
- 6 失職もしくは失業は「根こぎ」の二乗であるとヴェーユは言っている。これを敷衍（ふえん）すると、家賃を払えず居住地から追い出され、

- 路頭に彷徨うか、ネット・カフェに寝泊まりしている若者たちの状況は「根こぎ」の三乗・四乗と言えるだろう。こうした状況を放置しているのは国家（と政治家）の責任放棄である。いわば国家犯罪とも言える事態である。
- 7 The Corrosion of Character第4章（判読不能）
の中でパンの製造工場でのある女子工員の話
- 8 板倉聖宣『時計からオートメーションまで』国土社、第8章
- 9 橋山禮治郎『リニア新幹線巨大プロジェクトの
「真実」』集英社新書（2014. 3）
- 10 「社会運動」No.424（2016年10月号）
- 11 <http://cpri.jp/1104/>
- 12 <http://www.zck.or.jp/site/column-article/4650.html>
- 13 藤山浩『田園回帰 1～8巻』農文協（2015. 6）
藤山浩編著『「循環型経済」をつくる』農文協（2018. 3）
- （なかた しげあつ、明星大学名誉教授）